



蘇蘇林

目次

隨筆

蘇蘇國立未來

記

會費に添へて

東管採集登山

鴨綠江畔より

和歌

雜詠

俳句

雜報

學校記事

校友會記事

寄宿舎便り

會員消息

其他

大正六年四月廿五日 第九拾號 每廿五日刊行 第四千六百四十四號 第三種郵便物 認四日可

隨筆

◎蘇蘇國立未來記

會山子

余は客臘中本文一篇を新春の誌上に寄稿すべきを約しながら今茲に漸く其實を果たさんとすに至れる所以のものは本篇の主人公松岡縣會副議長に實すべき數項を賈すの時機辛じて近々到來せるに依るものなり、而して又母校が國立として移管成否並に其時機に至つては吾人の預り知らざる所なれども只我四百の同窓生諸君へ本問題成り行きの概況を報し併せて少からず私財と時間の考慮を本問題の爲めに犠牲せられし松岡氏に向つて深謝せんとするにあるのみ

去る大正二年春頃よりは兩政整理の聲全國に喧しく而して本縣又依田知事に依て大斧鉞を加へられんとして彼此非語紛々たるものあり時の木曾山林學校は上伊那農業學校へ合併せられんとすとの説屢々吾人の耳朶を叩き吾人をして其無謀を嘆せしめたる事一再ならずりし

同年四月頃母校縣立の殊勳者大澤縣會議員は職を退き松岡氏代りて大澤氏に繼ぎて本校の爲めに盡さるゝに至れるは抑も本問題の序幕として一應叙説の要ある處なり（此間多少政黨的政略の含まるゝもの有りし由なれど吾人は之れを知らず）

同年十一月松岡氏は縣議瀧澤只助氏の同意を得て之れが提案者となり二十有餘名の賛成を得て縣會に國立意見書（後に掲ぐべし）を提出せしに滿場一致可決確定し直に議長

より内務大臣へ提出を了せり之れ本問題が世上に傳へらるゝに至れる先驅たりしなり

翌大正三年一月貴族院議員杉田定一衆議院議員福井三郎（岡山縣撰出）島田敏雄（島根縣選）出の三氏政治視察として木曾を過り序を以て母校を訪ひ本校の状況他の農林學校と全く趣を異にするものあるを識認せられ質問應酬の間又同行せる松岡氏は勿論時の西筑摩郡長平川氏等口を極めて其の素質の國立たるべきものなるを辯疏應答し竊かに國立案成立に盡力を乞ひしに三氏共國立案請願に關する順序並に手續を詳細に説示し尙同案提出に際しては充分盡力すべきを約せられたり

之れ本問題が漸く世間に根柢ある聲として聽取せらるゝに至れる動機とす

越つて同年二月十三日縣參事會の召集せらるゝあり、松岡氏は機逸すべからずとをかし（次の縣會迄延期せば同年の帝國議會に間に合はず）態々出張して時の參事會員丸山盛雄、花岡次郎、笠原五百藏等諸氏の會同を求め前叙の事項を告げ國立請願に盡力せられん事を乞ひ依田知事に告げて其内意を問へり然るに知事は『縣立の實業學校を直に國立に變更の請願は稍穩當を失するの嫌あり宜しく本縣の地勢、状態に鑑み國立の山林學校を設立せられ度きを請願し若し同校設立に際しては縣立木曾山林學校の營造物全部を提供すべし……』とするの案に改むべしとの意見に倣ひ茲に知事案なる國立

大正六年四月廿五日發行 印刷所 川崎印刷所 發行所 長野縣西へ郡松岡町二八九番地 澤田書店

山林學校設立請願書を提出する事とし、時の縣視學佐藤寅太郎氏の少からざる援助により矢張り形式に法り提案(次號記載)の準備成り大井縣會議長外各議員の調節を求め(縣下四十有餘の議員其他の調節を乞ふべく茲に一奇談あるも略す) 同三月五日松岡氏は前途に光明を幻想しつゝ、「苦心の出來上り物」を携へつゝ、意氣揚々上京せり、爾來寢食を忘れて普く本縣選出の代議士(本縣選出の代議士十名を會見すべく専念奔走して尙數日を費せり)其他名士、知人を訪ひ以て本問題に關する盡力を乞ひ又下院の紹介者には曩に援助を約せる福井、島田、の兩代議士上院には杉田、江原の二氏の承諾を得、所謂面となる形式を履み又長谷場文相、原内相よりも相當盡力すべしとの内諾を得て愈々帝國の檜舞台に木曾山林學校問題なるものが提出せられんとするの順序となりたれども天は未だ本問題の決定を早しとせるにや同年三月末山本内閣は無慘にも瓦解の運命に逢着し肉瘡を骨疲れて投ずるに私財百餘金を以てせる松岡氏をして只管呆然自失せしむるの外なかりし、之れ木曾山林學校國立問題として噂に傳へらるゝの一半とす。(未完)

◎會費に添へて

琉球にて 豚 狸

今年は何十年振りの大寒大雪だつたさうだ雪は豊年の貢まが御芽出度様だ、凍死が

古雅幽婉な古琉球の歌調が忘れぬやうに行きつゝある舊正月を迎へ婦人は尙昔の服装を改めないものが多いけれども古琉球は東洋唯一のハイカラ國であつた彼等は歐人の印度に渡りをつけぬ以前爪哇スマトラに遠征し貿易をやつて居る徳川時代に於て琉球は長崎の表門に對する裏門で薩摩を経て文物が移入された。鐵砲、甘蔗、甘藷、竹、等は其の最たるものだ。然し國域が小さい慶長以後薩摩の爲めに酷い誅求を受け支那や南洋貿易の小事とあり、利益は凡て島津藩にとられた。進取發展の固有性が曲げられ、事大、姑息の民となつてしまつた。琉球民族は大古南九州に移住した。我が祖先と同族で神武帝以後我が祖先の東方發展北進政策をとつたのに反し此の一族は南方發展西進策をとつたらしい。惜しい哉南島の波荒く島少く豊葦原でなかつた結果人文の發達も旨く行かなかつた。爲朝が伊豆の大島から逃れて此に來り、其の王朝に入つて以後三四百年間即ち鎌倉時代から戰國時代の間於て最も充實した黄金時代を顯出した。大琉球なる語は史家により此の時代に命名して居る。爲朝の子舜天王、中山王となつて以後南山王、北山王起り鼎立して覇を争ひし結果は尙察度の明朝の後援を乞ふ可く其の封冊を奉するに至り二山亦之に倣ひしも尙巴去るにより、三山は統一され大島、宮古、八重山又王朝に直屬するに至り尙眞王によりて中央集權が行はれ、日本本

あつたり雪類があつたりしてはかまはん電車汽車の衝突工場礦山の災害各都市の大火潜航艇の暴出し等田合者には目を廻す様事許り報せられる。こはや恐しや、琉球も想應に寒かつた最低攝氏五度迄來た六十年振りで雪の降つた事であつたと言ふ種子島へも今度は二十年振りで海岸迄雪に包まれたこの事何しろ火鉢もストーブもない況や炬燵を木炭の價段が倍になる海岸では魚の凍死が多く二十斤も三十斤も拾つた人がある役所で三つ許りある火鉢の奪ひ合ひも二興さ

あつたり雪類があつたりしてはかまはん電車汽車の衝突工場礦山の災害各都市の大... 火潜航艇の暴出し等田合者には目を廻す様事許り報せられる。こはや恐しや、琉球も想應に寒かつた最低攝氏五度迄來た六十年振りで雪の降つた事であつたと言ふ種子島へも今度は二十年振りで海岸迄雪に包まれたこの事何しろ火鉢もストーブもない況や炬燵を木炭の價段が倍になる海岸では魚の凍死が多く二十斤も三十斤も拾つた人がある役所で三つ許りある火鉢の奪ひ合ひも二興さ

土、支那、南洋に旺に貿易を遂げ、大いに氣勢を張つて居つたが葡萄牙人の東進と薩摩の大坂戰敗の餘憤を茲に洩らした爲めに前述の如き萎縮した奴隷生活の二百餘年を續けた。併し明治維新の我が國の改革に逢ふて尙察度以來繼續せられた支那との關係を絶ち純然たる帝國の一領土となり、文物制度又他府縣に差なく土地の邊僻なるも舊慣の捨て難きより其の進歩に多少の遅きはあるにしても着々改良されて行きつゝある。人口は我が國でも最も多い。地方で百六十八方里の面積に五十五萬の生靈があり、土地の三分の二は山岳及び荒野にして人の住まない處である。従つて海外展の途が講せられ布哇移民を先驅として北米、南米、比律賓等に出稼させるもの頗る多く明治、大正聖代の餘恩は琉球民族をして四百年前の黄金時代を更に世界的ならしめんとしつゝある。氣候の挨拶で止める積りの一文がとんでもない杜撰な歴史觀にあつてしまつた丸山君に見られるとあらすも哉乃至は憐れなものかも知れぬ。併し僕にとつては自己に對する忠實なる努力なる事を七〇%程信ずる。夫れがイロの何れに屬すと評定さるゝにしても而して我輩の林友誌に對する態度は熱烈に愛讀すべきもの、するに足るものとして着冊を指折り數へて待つもので凡ての記事から小生は何物かを貰つて居ります。外の書籍や雜誌から貰へぬと思はれる或る尊き様かものを。加藤純一君から二年

言ふ岩田君の御説の通りだが茲は豚と言ふ來た來た何が來た 正月が來た 旨い旨い何が旨い 豚が旨い 是は琉球の子供の正月を迎ふるの聲だ 二十八日が豚くくも二十九日が豚殺しと言ふ兼ねて入念して飼養して置いた豚を屠殺する海岸に並ぶ數千の豚屠刀にあぐる最後の悲鳴の高きを誇りとする蓋し肥養宜しきを得たものは聲が高いからだらう 松の内五日大に豚を喰ひ泡盛を飲んで大に祝ふ男子よく蛇皮線と稱する小弦器をこつて克く弾じ克く歌い克く舞ふ女子は娼婦の類にあらざれば樂器を手にせず歌舞又男子に劣る蛇皮線は三味線の爺にして虬龍の皮を以て胴を張り棹は琉球特産の黒檀を以てす歌種歌調幾百十壯嚴古雅幽婉より單調質朴輕浮に至る僕等には薩張り解らないが只口説と稱し學校の唱歌に相應しき道中歌訓歌物語歌があり研究したら面白そうだ 泡盛は島特産の焼酒で内地の焼酎に比す可き強度がある麴及酵母が違ふさかて原料は矢張り米であるが特殊の芳醇及風味がある三升三十五錢乃至五十錢で晩酌の五勺で陶然と酔へる一合のんだら由良之助三合ものんだらへべれれた値段の安いは税金が安いから内地へ移出すると六七十錢になる こんを結構な酒や旨い豚があり特有の歌舞があつてもビール正宗の防腐劑の澤山入つたのが随分邊僻な處迄移入され鐘詰と稱する金氣臭い半腐品が普及する若いものには

◎東笹採集の爲筑波山に 登るの記

久保田 洋舟

あづま笹採集の爲其原産地たる當陸國筑波山に登らんすとす、四月五日曉起きして六時發の列車に投ず、上野驛に下車せし時は八時半にして海岸線の下り半時四十分迄には二時間餘あり、花時の此頃態々地方よりは花見に來る人も多かるに只ぼんやり停車場に待つも氣の利かぬ事と思ひ即ち策を上野公園に曳く、道を左に取り不忍池畔を過ぎり東照宮に詣つ、櫻花は今や三四分の綻び

二月二十五日、日曜の午後この稿を終らんとする。さき細君あはたしく味増進なもつて豆腐買ひに走り、女兒泣いて後を追ふ。かまごに薪くすぶり落し、日福木の影に没せんとす。

也盛り迄には尙數日あれど花見の人は既に踵接たり、彼方の池畔には遷都紀念博覧會の館見ゆ、入りて觀たしと思へども時間之餘裕あらざれば踵を廻らして停車場に戻る發車前二十分也、馳て發車海岸線に依りて北走す、江戸川の櫻は上野に運る事數日並びしものいさ少し、關東平野を走り坂東太郎を渡り霞ヶ浦の時土浦町に著せしは正に午後一時なりき、校を發する時此處より筑波町迄は自動車の便ありと聞きたりしがは立場は何處なるかと道行く人に問へるに會社閉ぢて今は自動車なしと云ふ、豫定の時間に二三時間の異動を生ぜり、止むを得ずガタ馬車に乗りて揺られつゝ藤澤を過ぎ小田を経て一小都會北條に著す、土浦を距る五里也、小田を走る頃よりは前方に筑波山の雄姿を望むを得たり、北條よりは馬車も通せず即膝栗毛に鞭ちて進む、半里にして筑波山の麓日井の里なり、之より坂路を登ること更に半里にして中腹なる筑波町に達す戸數二百餘旅宿の設備も整へ名物を賣ぐ家茶を賣る店も數軒ありて登山者を慰むるに遺憾なし、余は先づ町役場を訪れて東麓の有る場所を問ふ、吏員中之を知らず其名を聞くことも今が始なりと答ふ、轉じて小學校を訪ひて尋ねしも知れず、去て旅宿江戸屋に投ず。

翌六日曉起學校より携へ來れる竹類圖譜の外油紙一枚、麻糸一把、古新聞紙數枚、唐

紙一丁、花紙一丁、辨當一箇を整へ携へて草鞋を穿ち(神社に參詣するのみの登山には靴にてもよし)七時宿を發す、先づ町の北に位する筑波神社(里宮)に詣てそれより道を左男体山道に取りて登る、路傍に一人の男の薪採れるに會ふ、余を見て不審そうに眺めつゝ、「ためへは鐵さ持つて何しに行くだ」と問ふ、余答へて東京から熊笹を採取に來たと云へば「熊笹を指す」項上にはい、も澤山あるが(熊笹を指す)項上にはい、己ら兵隊に行つて東京に能く知つてゐるだ」と懐しうに云へる様甚だ質朴にて面白し行く行く捜せども熊笹、根笹のみにして東麓らしきもの更に無く山道崎嶇たれども笹を求むるに心奪はれて些の勞も覺えず、途上一茶亭あり一老人内より叫びて此處は女男川(ミナノ川)の名所なり休み給へと云ふ、教へらるゝまゝに見れば小さき谷川の潺々たるあり、彼の陽成帝の詠ませ給へる「筑波嶺の峯より落つる女男川戀ぞつもりて淵となりぬる」の御歌にあるは此河にして筑波の男体、女体兩山より出でし水合して女男川とされる也と茶を賣りたるの餘り親切に教へて呉れたり、下の茶亭に憩ひてより間もなき余は之を立ち聞きて聞き儲けのまゝ更に膝栗毛に鞭を加へぬ、登ること十四五町にして五亭と呼ぶ茶亭あり男体山道と女體山道との分岐点に當り元は五軒ありし由なれど今は三軒のみと傳へり、名物

夫婦餅を賣る、小さき餅二個を串に貫きたるを男子とし豆腐の田樂二個を串に貫きたるを婦人なりとし一對を以て夫婦餅と云ひ無妻無夫の人之を食せば良妻良夫を得らるべく有妻有夫の人之を食せば夫婦の間睦睦ひへしとは茶亭の老爺の説明する處也、余の傍に憩へる大田樂の味良ければとて之のみ數串を注文すればあなたは女が御好き也と老爺が云ふ、仲々の愛嬌爺あり、此より左に登ること五町にして頂上男体山神社に達す、伊裝諸命を祀る(歴史には明かならざれど口碑に依る)、縣社也、眺望絶佳にして關東平野双眸に入り土浦通ひの道は眼下に白布を延へたるが如し、社殿に隣して氣象觀測所あり元山階宮殿下の御經營遊ばされしものにして明治三十五年の御創業に係り我國唯一の高山觀測所也(海拔二、八七二尺)殿下の麓去せられし後明治四十二年文部省にて御偉業を繼承し今は同省に屬せり附近に高山植物多く夏時學生の登山する者多しと云ふ、亦春及秋には參詣する客いと多しと聞く、此日參詣の男女も甚だ多かりき、筑波山の森林分布を見るに下部は杉、赤松帯にして中部は樺帯をなし上部は山毛櫸帯之を獨占し頂上附近は殊に熊笹根笹繁茂せり。

男體山上に至るも猶東麓を發見すること能はず大に失望せしも尙歸路女體山道に一縷の望あり、男體山上を辭して五亭に戻り更に道を右女體山道に取り辿ること六丁に

して女體神社に達す伊裝諸命を祀る、亦縣社也、眺望男體山よりも快佳にして晴れし日は鬼怒川、利根川の白布を曳けるが如き手賀沼、霞ヶ浦の鏡の如き遠くは富士山、淺間山、妙義山等をも望み得へき由なるも此日は曇天にして眼界霞に閉され態に望見し得ざりしは遺憾なりき、此邊りも熊笹は多けれど東麓らしきもの更に無し、神酒を汲み呉れし社殿守の老人に竹類圖譜の圖を示して尋ねしに此麓の女體山道より數丁右に入りし處に熊笹に稍異なる笹の在れど其圖の笹とも異なるらしと答ふ、余は兎も角も其處にも寄りて見んと禮を述べて別れ女體山道崎嶇たる處を下りつゝ或は眼を上げ下界の平野を眺めて高山の氣分を味ひ或は視線を落し路傍を凝視して東麓を捜す、斯くして下ること數丁にして高天ヶ原の舊跡と稱する處あり、岩盤高き處より鐵の階段十數階を架せるもの參詣者の通路たり、高天ヶ原より降ること數丁(麓より十五丁と誌せる標杭あるを後に見出せり)途の右方に於て東麓と覺しき笹を發見せり、余の心臓は急にステテコを踊り出せり、一見小笹笹に酷似すれども竹類圖譜の記載と對照し仔細に之を檢せしに次の諸点に於て小笹笹と相異り全く東麓なる事を確め得たり、而して附近十三四坪の内は此笹のみ繁茂せり

一、小笹笹の葉は葉長三寸乃至五寸幅七分乃至一寸二分にして幹頭に於て多く五葉宛散生下垂狀を爲すも東麓の葉は

小笹笹の葉より小にして細く葉長二寸乃至五寸幅四分乃至六分にして幹頭又は枝端に於て四乃至六葉宛上方に集り向ふ傾あり

二、小笹笹は全形矮小にして高さ二尺内外あるも東麓は幹高二尺以上普通三四尺にして五尺内外のものもあり

三、小笹笹は枝を出すこと稀なるも東麓は枝を分つ事多く且幹と枝との爲す角大にして殆んど直角に近し

余大に喜び輒ち鐵を執りて之を掘り採り根部を油紙に包み更に古新聞もて包みぬ、偶々一老人(後に此附近の者なるを知れり)來りて余の笹を採りつゝあるを見、怪みて何を爲すかと問ふ、余答へて此笹を取らんが爲態々遠方より來れる也此地方にては此笹の名を何と呼ぶかと問へば老人大きく頷きて此地方にては一般に熊笹と呼ぶも一部の人には此笹を天狗笹と呼ぶと答ふ、余更に問ふてもつと多く此笹の有る處は無き歟と云へば此處より數丁下りたる處に平地ありそれより小徑を右に辿ること數丁稍々平坦の場所あり、其處は此笹のみなりと教ふ(女體山神社守の老人の教へし場所と同一也)老人に厚く謝し別れて教へられしまゝ至り見れば余り廣からぬ面積なれど老人の言の如し、即ち東麓茂生の狀を詳く知るを得たり、踵を廻らし笹を携へて意氣揚々宿に歸りぬ時に午後五時半、逆旅の主人も余の爲に「まあ笹が有て良かりき」と喜び呉れぬ

夜疲勞を慰せんといふ叫びを呼べば初物の宿來りて膳に上る、漸く疲を醫して心地良く眠に入りぬ。

翌午前七時出發筑波町を後にし小田を走り仰きて筑波山の見送を受け土浦を過り東京を経て午後八時無事青梅町に歸れり。

此旅行短かりしと雖余の興味を啓く事多大ありき。(四月十一日記す)

◎鴨綠江畔より 坂本光太郎

昨年四月、音にも波高き玄海灘を越へ、虎の棲むて朝鮮に渡つて國境なる鴨綠江畔に新領土の空氣を呼吸すること滿一ヶ年、此の間鮮人は勿論國境のことなれば支那人の如き言葉も通はぬ輩を相手に、春さは雖花一つだに見られぬ鴨綠江上流へ森林調査のため出張し、或は仙人生活をなし、或は新義州の緑滴るアカシヤの下に三伏の暑氣を避け、或は國有私有區分調査のため浮世離れて奥山住居に猿(内地の鹿に類似す)の啼き聲を耳に異郷の山月を望み、或は鴨綠江も水山と化す零下卅三度を昇降する寒暖計を眺め、シベリア嵐に吹かれつゝ今日にいたりし一ヶ年のヨホ生活にこの岐蘇仙人は全く眞のテクセンジンと化したるなり何か朝鮮の林業に關して書き度く思へども渡鮮以來日尚淺くして未だ深き調査も遂げ居らざるに依り、こは他日にゆづり今回は自分が筆に「北朝鮮誌」を讀みしとき其の

中より拔萃し置きたる朝鮮人の氣質を御紹介して、林友の餘白を汚して見たき考にて先づ、本號には最初朝鮮人の人情及古來の階級に就きて其の大體を紹介せんと思ふ。

北朝鮮地方の人情に就いては古來諸説ありて未決問題に屬すと雖も大古、扶餘、沃沮、穢貊等の諸族割據し後周代に至りて漢人の移住者多く尙傳ふる所によれば豆滿江岸附近に「アイヌ」人種の系統あるもの、如し要するに現今の鮮人は是等諸民族の血液混合せしめるべし、殊に北鮮は古來本邦との往來頻りなりしより我對岸民族の血統を遺したるは、又疑ひなき事實なるべく、自然の氣風に染み之を南鮮に比すれば若干の活氣あるを見る、然れども、一船に氣力なく隨て其懶惰なること天下に其の比を見ざるべく、午睡と雜談喫煙とは、彼等が終日の仕事なるべく、明日に要すべき米鹽の計を案するは彼等に於て無用の事あり、殊に勤勉貯蓄の心なく財を得れば即ち散じ食盡くれば漸く其職に従事するの風習ありしなり元來彼等にして若し資産を蓄積せば韓政府は過酷の租税を賦課し、吏員は不當の賦課金を命じ民にして之に應ぜざるものは刑罰禍害立どころに至る。依つて此を以て財を作るは禍を作るをなし悠々徒消し窮するに至れば餘裕ある同族に赴きて救を求むるの易きに如かずとなす。悪政の感化は遂に國民をして滔々遊惰の民と化せしめんとす。

斯の如く幾百年の久しき暴壓に苦しみめられし彼等は發奮邁往の精力を消耗し盡し、自然に於ける抵抗力さへ失ひ降雨にだも反抗するの氣力なく防雨の用具さへ具へざるに至りしなり。斯く極度の暴戻に屈伏せられたる彼等は政府に親しむ事なく、犬猿相反目して遂に國家的觀念を失ひ、公共心欠乏し今や愛國心の如き殆ど見るべからざるに至れり。然れ共日韓併合後彼等の氣風一變すると同時に諸般に亘り文明化し且つ母國を慕ふの念漸く見るべきにいたりしを、我國民として實に喜ぶべき現象なり。尙彼等に於て今や國家的觀念を現し、其職に勵み著財國富に力むる者あるは殊勝の至りなり。亦彼等は家族的團結力の大に發達せるものあり、一族は一家の如く榮枯浮沈を共にし一人身を起し志を得ば同族相率りて其の門に押しかけ哀を訴へて憐る所なく尊方正當なる權利なりと思惟す、又彼等は絶て社會的制裁、社會的義務を負ふ事なれども其の家族間に於ては強烈なる制裁と義務を負担せざるべからず。同族の一人に負債あれば全族連帶して之を償はざるべからざるが如き其の一例ありとす。而して彼等の神聖なるは又驚くべきものあり。些少の事雖も怨恨憤怒し又歡喜熱狂す、然も一小打撃に遭遇すれば、忽然落膽頓挫して再び起つ能はざるを常とせり。

朝鮮は古來官民の階級制度頗る嚴重にして兩班、常漢、奴隸の三種に分れ互に婚姻を通せず交際をなさざりしを以て上下親和の機なく國力發達上少からざる阻害をせり明治廿七年に至り此の制を廢するに至る然りと雖其は單に名目のみに過ぎずして、依然今猶其制の行はるゝを見る。是れ古き習慣の然らしむる所なり、今之が階級に就て一々其の説明を加へんに兩班とは其の族の稱にして政事上社會上至大の勢力を有し代々文武官職に就くべき當然の資格を有せり武官世襲の貴族は朝議の際、西方に列するを以て西班と稱し文官世襲の貴族は東方に列するを以て東班と稱す。兩班の名蓋し之に基因せしものならん、入つては廟堂に政事を論議し一門一家の利を謀り出でては一般人民跪坐の尊敬を受け來りし閥族にして今猶其の風習の一部分行はれつゝあり、次に常漢とは朝鮮普通民にして農工商の實業に従事するもの之なり、階級制度廢止と同時に官吏となり得るの宣言を受けたれど雖因襲久しき俄に改まらず依然兩班の壓制に屈從し實業事務の被治者して何等の權利を與へられざるに有ゆる義務を負はざるべからず。然りと雖併合後實力の發達に伴ひ之等常漢の漸く山角を現すに至り、現在に於ては、豪農商等に對し兩班と尊稱せらるゝに至れり。而して最下位にある民族を奴隸と稱し居れり。之に公賤と私賤との別あり公賤は官の使役に屬し私賤は兩班、中人等に使役せらる奴隸は犯罪の結果によりて成

りし者もあれど、世襲若しくは自ら身を賣りてなりし者多し。該奴は物品と同じく賣買せらるゝも中古歐洲に於けるもの、如く苛虐なる待遇を受ける事なく通常の雇人同様に使役に服するに過ぎざるを以て、貧困の常漢よりは却て生活状態の豊あるものあり、尙ほ現時我が領土となりてより我官憲或は農工商等に使はるるもの逐年増加の趨勢を示し居れり、茲に中人と稱する一階級あり、之れ兩班の次に位し政治的の族制にあらずと雖職業に依りては兩班と常漢との中間に介在し自ら一階級をせり、中人は醫學通事天文地理祭禮等の職務を有し、朝鮮に於ける最も智識ある種族に屬す。明治廿七年の改革以後中人にして各部の官吏及地方官等に採用せられたる者少からず。現に當時に於ても官職にある者非常に多し。而して事務能く整ひ其の任に適すること兩班の比にあらずと云ふ。中人の多數は尤も平均せる生活をなし又最も國民的勢力を有し居れり。其他鮮人として長幼の序最も極端に行はれ、幼者は事の曲直に論なく、長者の言に従はざるべからず。長者は恰も我陸海軍の上長官たるの觀あり、故に長者は郷黨の主宰者なるを以て鮮人を懐柔せんと欲せば、先づ老翁を籠絡せざるべからずと、鮮國通の唱導するところなり。(未完)

文章のみにては充分に此の目的を達し難きに依り、若しこれに就き詳しく知らんとする諸兄は、失禮乍らるはがきの御交換を乞ふ。(朝鮮總督府營林廠坂本光太郎)

和歌

◎春九吟 平田久良治

曙の枕の下を水音のさやかに流る伊那の初春

伊那の里春暖き川の音に伏屋の桃の花今ぞ咲く

菜の花と霞める山と繪日傘と水美しき夕暮の村

齒磨のうす桃色の粉を散らす春の夕の小鼠の群

君をます向の島の松原に赤き灯ともり春の日暮れぬ

まごろみの夢の怖れにかく物思ふこと多き春の灯

雨晴をほのにおかめる椋の芽のかけより出でぬ春の夜の月

母と立つ隅田の河原のひんがしの木立はのかに春はたけぬる

三年振をさか心に鞠つけば君笑みましぬ我が手たゆたふ

白き雲すつと谷間に下りたれば海の如しも空ははるけし

赤々と夕日かややく斷崖をみればつひに涙ぐみたれ

唯ひとり歩むわが身まわりの林の木ども懐しきかな

□房總の春

麥の芽に春雨しとさけふりつゝ薄ら〜に今日も暮れけり

仄間にふつと蛙の聲きゝぬうなだれしわが胸のさびしき

ちゝ色の春雨がふるふつとらと櫻の花芽ふくらみにけり

□生二山の断片

白日はかつと明るし生活に追はれたればわれ一生この職業にてをはるかと思へばひたに涙ぐむるも

我といふ果敢なき男世にありて涙の中に生さんとするか

俳句

華山樵夫

春何處と問はゞ答へん梅柳鉢植の梅に春まつ田舎かな

東風ふくや天神様の梅開く

猫の伸び映る障子や梅の花杖つきし木も若返るやあきかな

◎雑詠 露英子

□清澄山にて

◎學校記事

第十四回卒業證書授與式 本校第十四回卒業證書授與式は三月二十三日午前十時より講堂に於て舉行せられたり本縣よりは知事代理寺屋縣視學臨場、一同着席するや、校長式の旨を告げ勸語捧讀、国歌合唱、型の如く北村教頭學事の報告をなしたつて校長は卒業生各箇に證書を授與し更に各學年優等生並に皆勤精勤生に賞状を與へ終つて卒業生に對し懇篤なる訓辭を告げ教戒激勵する所あり卒業生一同も深く胸底に徹しけん稍々伏し目勝ちに無量の感慨に耽るもの、如かりき、次に守屋知事代理は告辭を朗讀し次に泉對郡長の祝辭にかゝる希望演説あり、松岡縣會議員は祝辭に併せて本校國立問題に對する自己の所見、幹旋の經過等を述べて壇を下り、丸山信海記者は本縣治水土木費の莫大なる等より説き起して林業の重要なる所以其職に當る卒業生の責任の重大なる事を述べて囑望する所あり次に三村福嶋小學校長及安井正夫氏の祝歌朗吟あり、長谷川福島町助役は卒業生父兄を代表して謝辭を述べ、在校生總代の送辭、卒業生總代の答辭にて正午式を終へたり

卒業生の出身地及氏名左の如し
原籍 氏名(イロハ順)
岐阜縣 岩田元吉
西筑摩郡 伊深幾太郎

- 福井縣 出雲秀一
西筑摩郡 伊藤善藏
同 上 長谷川毅
同 上 原治二
岐阜縣 小田田實
同 上 與村和吉
同 上 各務傳六
東筑摩郡 上條芳郎
下伊那郡 吉川光夫
富山縣 高峯傳治
西筑摩郡 武居章
山梨縣 丹澤潔
西筑摩郡 武居喜太郎
岐阜縣 曾我義郎
西筑摩郡 長坂清人
東筑摩郡 村上英勇
山梨縣 向井惟晨
山口縣 藏田毅郎
同 上 藏尾眞
岐阜縣 安江悅次郎
靜岡縣 山下不二三
三重縣 松嶋長二
西筑摩郡 前野今朝次郎
小縣郡 富士川鏡一
西筑摩郡 藤原幾喜
東筑摩郡 古畑今朝茂
上伊那郡 小岩井茂樹
更級郡 赤羽三郎
下伊那郡 新井清美
種原武重

- 東筑摩郡 宮嶋岩見
山梨縣 皆川秀雄
南安曇郡 白木老雄
下伊那郡 下平通雄
下伊那郡 平田久良治
山形縣 鈴木繁
賞状受領者
優等生 岩田元吉、長坂清人、宮嶋岩見、小田實(以上卒業生)、唐澤繁夫、細窪友一郎、内山伊那登(以上三年)、米久保春雄、宮澤末雄、鷹見勳、篠原將英(以上二年)
在學中皆勤者 小田實、伊深幾太郎、原治二、山下不二三、小岩井茂樹
同上精勤者 藏尾眞、丹澤潔、富士川鏡一
本學年中皆勤者 岩田元吉、各務傳六、安江悅次郎、宮嶋岩見、吉川光夫、出雲秀一、藤原幾喜、高峯傳治、古畑今朝茂(以上卒業生)、細窪友一郎、唐澤繁夫、梶田實治、星加正雄、瀧澤銀次郎、横井正守、木下武夫、小林右内、加藤七藏、志津洋祐、下島俊二、原正次、近森良材、日野櫻亮、月田喜代佐、杉山義次、和田實也、島田徳之助、北川春(以上三年)、篠原將英、米久保春雄、

坂卷利一、佐塚甲子、山本茂、星加晴雄、大木多喜雄、矢島穰、林森、井上新次郎、大瀨房人、吉澤豊二、後藤豊吉、和田常次郎、中村治郎、小林盛大、宮下武夫、小松義三、福川正三、山崎多門、富士川金二、大久保幸福(以上二年)
井上寛一、内田新之助(以上三年)、青木忠太、家高碩二、佐藤坦、草間勝、前野秀宗(以上二年)

卒業生送別會 卒業式當日午後校友會にては卒業生の送別會を催し三年二年の諸君交々立ちて惜別の情を述ぶるあり今後の奮闘を鼓舞するあり卒業生も二三立ちて謝辭を述べ校歌を合唱し卒業生の万歳を三唱して閉會
謝恩會 送別會後、卒業生は職員に對する謝恩の意を表する爲茶話會を催したり席上校長の挨拶、大場級主任の希望演説及内藤技師の席上談話等あり和氣霽々裡に散會せり
式場にて朗讀せる知事告辭、在校生送辭卒業生答辭及祝歌等左の如し

長理縣立木曾山林學校第十四回卒業式ニ臨

送辭
大正六年三月二十三日 長野縣知事從四位勳八等赤星典太
諸子ニ諒クル所アラントス、抑本縣、到處鬱鬱タル天與ノ美林ヲ有シ全國ニ於ケル第一位ノ森林國ナリ而モ其公育林野ヨリ生ズル林産物ノ産額ヲ見ルニ實ニ謂フニ足ラサルモノアリ山林國ノ名アル本縣ニ於テスラ猶此ノ如シ帝國林業ノ前途亦遠達ナリト謂フベシ、惟フニ我國林野ノ整理施業ノ研究等之ヲ歐米列國ノ實況ニ徴シ諸子今後ノ努力ヲ俟ツ多大ナルモノアリ諸子ハ宜シク此重任ヲ自覺シ帝國ノ前途ヲ察シ其履修セル所ヲ取ツテ之ヲ實地ニ施シ以テ我國林業ノ啓發ニ貢獻スル所アルベシ冀クハ本校教養ノ趣旨ヲ完ウスルニ庶幾カラシカニ言以テ告辭トナス
大正六年三月二十三日

答辭
凍雲纒カニ晴レテ將ニ陽春ノ佳季ヲ迎ヘントスルニ方リ茲ニ本日ヲトシテ生等三十又八名ノ爲ニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラレ知事閣下ヲ始メ來賓各位ノ臨場ヲ忝ウシ且ツ知事閣下並ニ校長先生來賓各位ノ懇切ナル訓辭ヲ賜ハリ又在校生諸君ノ深厚ナル送辭ヲ忝ウシ生等感激措ク能ハズ思フニ生等ガ今日此榮アルハ之レ偏ニ諸先生ノ薰陶ノ致ス所タラズンバ非ズ願レバ諸先生ニハ三歳ノ永キ春秋愚鈍頑冥ナル生等ノ指導誘掖ニ心勞セラレシコト如何計リナリシゾ、而シテ今復生等ノ前途ニ就テ懇篤ナル規誨ヲ賜ハル生等何ヲ辭ヲ以テカ之ニ答ヘン生

長野縣知事從四位勳八等赤星典太
大正六年三月二十三日 長野縣知事從四位勳八等赤星典太

たり申し候。十六日、三拾有餘名の新入生の入舎有之例の赤飯にて歓迎仕候。こゝに於て三星霜舎の父たり兄たり弟たる親しき誓は結ばれ、校歌の合唱、萬歳裡に閉會を告げ申候、懐しい故山の山河、親しき父母の膝下を離れたる新入舎生の中には、まだ乳をのみたらぬ様な君も有之、寮舎の窓にもたれて飛び行く雲に心を故郷に馳するも有之候、料峭たる會映の春寒も昨今漸く相退き櫻花亂發豊艶愛すべき候もこゝ、近からんと思ひ居候。(四月十七日記す)

◎會員消息

- 中澤楊君 先般森林警察に關する講習を受くる爲長野警察教習所に入所せる同君は三月中飯山警察署在勤を命せられ全地に赴任せり
- 水上壯三君 二月中森林主事に任せられ香川縣綾歌郡美合村中通保護區詰を命せらる
- 松上三郎君 昨年末群馬縣沼田町小林區署に轉任せられたり
- 近藤幸吉君 秋田縣本莊小林區署に在勤せる同君は三月中帝林管理局名古屋支局小坂出張所に轉任せらる
- 小松良輔君 三月末より小川研木所中立事業所雇として勤務せらる
- 柳澤得衛君 栃木縣林業技手柳澤得衛君は三月末月俸貳拾圓に昇級せられたり
- 林務講習 東京丸ノ内御料本局林務講習

習は四月三日より開始の由なるが本校出身の全講習生は左の九名なり
 大森久治君、小池新伍君、市川潔君
 金田美行君、黒崎洋治君、竹村節三君
 柘植五郎君、長谷部久雄君、喜多村弘君
 ◎中澤龜吉君 醫學士中澤龜吉君は今回浩一郎と改名せられたり
 ◎藏尾直君 山口縣玖珂郡廣瀬村ある吉川子爵家林業事務所に入れり
 ◎倉科浦一郎君 今回愛媛縣より長野縣に轉任せられたるが辭令左の如し
 長野縣技手一圓給與 倉科浦一郎
 任長野縣林業技手廿九圓給與
 ◎脇田義正君 今回西筑摩郡林業技手として赴任せられたり
 ◎柏澤國治君 今回本縣林務課に轉任せられたり

- 稻葉増吉君 全上
- 等々力官一君 上伊那郡南箕輪村林業技術員として赴任

◎林友代前納者氏名

- 一金壹圓五拾錢宛
- 曾我義郎君 富士川鏡三君
 - 藏尾直君 山下不二三君
 - 前野今朝次郎君 平田久良治君
 - 村上英勇君 丹澤潔君
 - 向井性晨君 榑原武重君
 - 小岩井茂樹君 小田寶君
 - 岩田元吉君 藤原幾喜君
 - 各務傳六君 皆川秀雄君
 - 安江悦次郎君 高峯傳治君

- 古畑今朝茂君 下平通雄君
- 新井清美君 原治三君
- 長坂清人君 長谷川毅君
- 白木老雄君 武居嘉太郎君
- 赤羽三郎君 伊藤善藏君
- 宮島岩見君 松島長二君
- 出雲秀二君 伊深幾太郎君
- 上條芳郎君

◎寄附 大場教諭は轉任の際左の通り寄附せられたり
 一金參圓 内貳圓雜誌部へ壹圓庭球部へ

◎林友代領收

- 金五圓 中澤浩一郎君
- 金壹圓 鵜殿正雄君
- 金壹圓 山崎三男君
- 金五拾錢 澤柳壽夫君

◎編輯部より謹告

聆蕩たる春風は春の調を奏て千株萬朶の櫻花は正に綻び榮花開く處蝶之に戯れ蒼穹圓き處雀雀高く鳴るの候校友諸兄には益々御清祥の段奉賀候さて今回不肖等黃嘴乳臭思想に何等の清新偉大なる筆に何等の精采生氣なき身をもちて先輩諸兄の後を受け茲にこの編輯の大任に當るに際し今更慚愧の至りに不堪候先輩諸兄幸に吾人の非才を憫まれ偏に御指導御援助を垂れ金編玉稿を雨下せられん事を切に希望仕候

- 部長 横井正守
- 副部長 星加正雄

振替口座番號 東京一七六〇〇
 長野縣立木曾山林學校